

哲學的

南 伸坊



ESSAY
BOOKS

哲学的

1983年 7 月25日 第 1 刷発行

著 者 南 伸坊

発行者 江口克彦

発行所 P H P 研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431

東京事務所 03(295)9211

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

© Shinbo Minami 1983 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-569-21103-8

林

南 伸坊

ESSAY
BOOKS

PHP

目次

恋愛論	恋愛とはカンチガイである	7
変態論	先生、オシッコさせて下さい	17
差別論	ヤーイのオニギリ頭	25
生命論	足袋をはいた足	35
女性論	愛の破綻（ホコロビ）	43
男性論	走り幅跳びのケツマク	53
変装論	オマールさんの制服	63
常識論	無知は涙か溜め息か	71

風呂論

風呂で屁理屈をこく

79

学習論

ソックリは何故面白いのか？

87

分類論

分類は思想である

95

死骸論

ゾーキン状の猫

103

音楽論

キョーシロー偉い

111

感情論

クサイ芝居に泣く

119

教育論

教科書問題問題

127

金銭論

おサツを燃やせ！

135

文章論

盗作エッセー

143

迷惑論

騒音公害とは何か？

151

媒体論

映画とテレビジョン

159

法律論

大麻汚染を考える

167

根暗論

エンギでもない

175

哲学論

開かずの扉のナゾ

183

興味論

ズバリ興味本位でよい

191

群衆論

群衆はメッセージだ

199

停電論

真の闇を体験してみる

207

大衆論

いじめ社会と江川卓

215

本文イラスト 著者

恋愛論

恋愛とはカンチガイである

いまでこそ、三角形のオニギリみたような顔をしておりますが、ボクの顔は生まれつきで、中学生、高校生のときも、やはりオニギリのような顔をしていて、囲りの人々も、十分納得をして、オニギリとかオムスビとか、ニギリメシというように、ボクを呼んでいたわけです。

小学校高学年のころには、もう自分でも十分納得をしていましたから、すでに容貌について、思い悩むというようなことは、なくなっていました。やはり、まだ人生を達観していない小学校の三、四年生のころには、オニギリといわれるとバカにされたと思ってケンカなどしており、ました。しかし、それがあまりにヒンパンでありましたから、そのうちアキがきたんでしよう、あれは、ボクをバカにしているんじゃない、ただ、オニギリにしているだけだ。という風に達観したわけですね。

小学校の五年生くらいからは、顔のことでからかわれて、怒るというようなことはまったくなくなった。それよりムシロ、そのことをネタに面白がるようになっていったようです。こういう

姿はハタから見ると、アワレをもよゝしたりするかもしれませんが、これは余計な心づかいというもので、ほんとうに本人は楽しんでゐる。つまり面白くても大丈夫になっているワケです。

だから、たとえば「ブスコンテスト」というものに応募してきて、日本ブス認定委員会から認定をうけたりして、うれし涙を出したりする、きれいでない女の子の姿などを見て、不思議がる人や、ヒドイワ！ といつて抗議の姿勢に入っている人などがいますが、当然マチガイなわけです。あれは見かけほどに複雑な心境ではないんですね、もちろん長い目で過去をさかのぼったりすれば、いづれ複雑にはなるんだらうけど、その瞬間は、ただ単純にウレシイ。そういうものとボクは思っております。

美人である、とか、モテル、ということとは自慢のもとになることなのですが、よく考えてみると「それだけ」のことなわけですね、それでトクをしたから自慢をするというわけじゃあないの、で、「美人はヨイ」「モテルはヨイ」というコンセンサスの中にいて、自分もまたそのように思っているので幸福なわけです。ブスコンテストというのは、カリソメに、ブスはヨイというシチュエーションをつくつて、まア「ブスがヨイ社会」のシミュレートをしたわけで、あそこで喜んだきれいでない女の子は、そのシミュレーションを一瞬、信じ込めたからこそ、喜びにムセぶことができた。同じように「美人がよい」「モテルはよい」というテーマも、そのように信じ込んで

いるにすぎない、といつてしまつてマチガイじゃないわけです。

まあしかし、美人の方がいいし、ホテルにこしたことはないですけどね、で、まあ、ボクも女のコにもてたいと思つたし、その女のコも美人がいいにきまつてる、と思つていた。達観したはずだった顔のことも、ロコツにそういう問題とクロスしてきますと、どうもそうスツキリ割りきれてたわけじゃないんだなア、と、そう思つたのは高校生のときでした。

地下鉄で電車を待つてますと、つい五メートルくらい先に、美人がいまして、うーん、という風にボクは心の中であつたんですね。うーんとうなつた。するとテレビシーで、そのうなりのバイブレーションが通じたのか、その美人がボクの方に視線を上げて、目が合った。

その瞬間ですよ、ボクはむろんマジな顔してます。熱い視線なんか送っちゃつてゐる、そのときにその美人が、

「ブーッ!!」

と吹いたんですね。オナラじゃありませんよ、吹いた。自分じゃ、そんなにうける顔だとは思つてませんから（自分は始終見てるから慣れてますから……）、で、なんでそんなにオカシイかわかんない、アツケにとられますよ。で、その美人は足早にどこもしれず逃げるように逃げてくんですね。反射的にボクは美人を追っかけちゃつたのね。美人は階段をかけのぼつていく、ボ

クも登って、途中でハタと気がついたのね、なんでこんなことしてんだろ？　ボクは、基本的に「誇り高い男」ですからこういうときに、自分のことをミジメだ、という風には考えないんですね、フシギだなアと思う。どういふことなのかな、これは？　なんて考えたりするワケです。高校を卒業して、芸大の試験にすべって、デッサンの研究所に通ってる所ですから、十八、九だったかな、毎日同じ道を同じ時間に歩いてると、必ず出会う、例によって美人がいるんですね、石鹸工場の女工さんですけど、これが、まア、バカな美人。

ボクは時間にルーズで、ヒンシュクを買ってる人物像なんですが、デッサンの研究所というのは、時間に遅れるといい席がとれなくてオージョーしてしまから、ま、かなりガンバって早起きしていったんですね、で、毎朝、釣り道具屋さんのあたりで必ずその美人に会うんです。美人というより美少女ね。

美少女は、ちょっと歩きかたがスマートでないんだけど、何度もじつと見てると、その歩き方も「いい」ことになるワケです、五十メートルくらい前からもう、それとわかりますから、ジッと見つめてる。十メートル、五メートル、一メートルと近づくんですが、美少女はこっちをチラとも見ない。これがまた、燃えるワケです。どうあってもこっちに向ける向けてみせる!!　つつうような気になって、視線に力を入れちゃったりする。

ところがとうとうある日、彼女がこっちを見たんですね、この時はうれしかったなア、や、や、やった、やっそこっち向いてくれた！ しかも、ボクを見て彼女は笑ったんですよ、ニコッと、こりやすいぜ！ ボクはもう、有頂天だったですよ。ハハ。で、その晩わざわざノートをおろしまして、「オレのモテモテ日記」と表題を書いて、その日から日記を書き始めたワケ。

日記を書いてるうちに、フと、気がついたのは、彼女はたしかにホホエミかけたけれども、あのとき、なぜか左手で口をおさえてたな、人はホホエミかけるときに口をおさまえたりするものだろうか？ あれはニコリとかニコツとかというより、プツツっている、あ、ちの方だったんじゃないか？ いちど不安を感じだすと、どんどんふくれあがつて、悲観的観測に傾くというのが、まア恋愛初期の心理状態の常態ですから、当然ボクも、悲観をしたんですね、チェッあのカワイイコも、どうせオレの顔が面白かったんだ！ なんてイバカヤロあのカワイイコめ！（なにしろ名前もまだ知らない）

で、翌朝ですが、一晩寝るとまたすぐ、樂觀をするというのがボクの性格で、もうウキウキ、時間通りに家を出て、釣り道具屋さんの三十メートル前までくると、もうニコニコしてるのね、で、同じ場所でカワイイコとすれちがうと、カワイイコは、はつきり、好意のこもった笑顔で笑っていたワケです。浪人のオニギリ頭はビヨン、なんてとびあがったりしてる。スキップなんかも

しちゃったりしてるワケです。

翌朝も、翌々朝も彼女はニッコリする。三日後には「お早よう」なんかいいあったりしてる。それだけで随分うれしいんですね、デッサンの研究所にもG Fはいましたが、なにしろ石鹼工場の方は美少女ですから、

「よし、あしたはデート申し込んでじゃう！」

なんて決めたりしてたワケ。ところがその日はどうしたワケか、彼女が姿を現わさない、ちょっと、気負って早く来すぎたかな？　ってんでもう一度同じ道をちよっと引きかえして、あらためてまた「自然に」歩いて来てみたいするんだけど、やっぱり来ない、そんな風に三往復ぐらいしてたけど、全然来ないからあきらめて、その日はそのまま、研究所に行ったんですね。

「風邪でもひいたかな？」

とか、まアイロイロイロイロ考えてくうちにまた、あの初日の笑いが気になったりもしたのであった。ところが研究所から帰ってくると、なんと！　彼女の方も退社時間で、バッタリ会っちゃったんですね、といっても、歩道がいつもと反対側で、彼女は気がついてない。ボクはもうドキドキして、大急ぎで横断して、後に回り込むみたいにして、追いかけたワケです。

そこで気がついたんだけど、彼女は会社の同僚らしい、女の子をつれていて、それが後から見

でもはつきりブスなんですわ、ロコツに。

「こりゃマズいな」

とボクも思っただんですよ、これはジャマなんだ、こういうシチュエーションでこういうブスはジャマですよ、きつとジャマしてくる。やや、不安はあったんだけど、もう、気分は殆んど今日はデートの日に予定が決まってるからボクは呼吸をととのえて、二人に歩調を少しあわせて歩きながら、スツと近づいた。で、

「あのお……」

って切り出したワケ、ものすごくダサイんだけどさ、ナンパってしたことなかったから、これはしかたないです。そうしたら案の定、ブスの方がふりむいてさ、ものすごいウサン臭そうな顔するわけです。

「あのお……、よかったら、お茶でも飲まないですか？」

だって！ ダッサイねー、オレも。でもしかたないんすよ、ハジメテだからナンパは……。そうしたらですよ、そのブスが！！

「ダメダメ、あたしっち、これから行くところあるんだもん、ねえ……え？」

だってよ、で、彼女の方を見ると、なんか、全然表情つつうもんがない。どういう気か分から

ない。

「いこういこう」

ブスがそういって彼女をうながすと、ボクをそこに残したまま二人、歩み去っていくんですね、こうしてボクのはじめてのナンパは失敗したんですけど、ボクはクルリと背を向けて、反対方向に歩いていった。しかし、とにかく樂觀主義の自信家ですから、彼女はきつと振りかえるに違いない！　って決めてるのね、さっきは何も言わなかったけれど彼女はオレに気があるんだからオレは彼女に背中では何ごとかいおう、と思ってるワケね、タッタッタと歩いていく、背中に物を言わせて……ね？

「ん？」

ボクは後ろに彼女の視線を感じたんですよ、その時。背中にたしかに感じた。一も二もなく、ボクも後をふりむいたね、バツと、こうかつこよくね、ふりむいた。

十メートル先に彼女たちは、のんびり歩いていて洋服屋のショーウィンドをのぞきこんだりしてるのだった。

ああ、やっぱり「恋愛」なんていうのは「勘ちがい」なんだなア、とボクはそのとき、つくづく思ったんですね。その次の日に彼女に会ったのかどうか、今じゃもう丸で覚えてないんだな。

ぼくは信じて
ふりかえった……

